申請者：高梨千賀子

論文題目　PCインターフェースの標準化競争：IEEE1394とUSBの事例

審査員　楠木　建
沼上　幹
青島矢一

本論文は、ある技術規格が対抗する技術規格をおさえて標準として普及し定着するプロセスに注目して、標準化競争を決するメカニズムについて、理論的・実証的に検討した研究である。より具体的には転送スピードに優れたデジュール・スタンダードのIEEE1394という規格とUSBとの規格間競争を取り上げ，後者が支配的な地位を獲得する際にインテルが行なったさまざまな活動がどのように作用していたのかを考察したものである。

本論文の評価できる点は、次の２点である。第１に、非常に重要で学術的に興味深い研究対象を誠実に追究している点である。技術規格の標準化競争の勝敗は企業の収益に長期的な影響を与える。ソフトウェアやメディアが重要な役割を占めるシステム製品やネットワーク製品が増大するにつれて、技術規格の標準をどの企業（グループ）が握るかという問題は企業経営にとってますます重要になっている。このことは、標準化競争のメカニズムを解明しようとする研究のいっそうの蓄積を必要としている。とりわけ、本研究が焦点を当てているIEEE1394と競争したUSBの事例は、（1）デバイス専業メーカーであるインテルがシステム全体にかかわるインターフェースの見直しを主導し、（2）IEEE1394が多くの企業の共同で開発されたデジュール・スタンダードであり、それゆえ初期の段階では賛同企業の数も多く、（3）伝送スピードなどのいくつかの点で技術的にも優位にあり、（4）インテルの支配力が強くなることを歓迎しない周辺機器メーカーがいたにもかかわらず、結果として標準化競争に勝利したという点で、きわめて示唆に富む題材である。これまでも標準化競争のメカニズムについては、VCRにおけるVHS対ベータ、PCにおけるウインドウズ対アップルなど事例研究の蓄積があるが、USBとIEEE1394との標準化競争に注目した研究はほとんどない。しかも日本のハードディスク・メーカーなどのいわゆるサード・パーティがなぜ，どのようにして，USB側に与することになったのかを当時の担当者たちに直接インタビュー調査を行なうことで明らかにしている．この点で本論文には事実発見的な価値も備わっている．

第２の貢献は、この分野で主導的な研究であるクスマノらの「プラットフォーム・リーダーシップ」の概念を事例研究によって深めたことにある。事例分析はUSBとIEEE1394との標準化競争のなかでも、とくに勝敗の帰趨に大きな影響を与えたHDD市場に注目しており、そこでのサード・パーティの支持をインテルがどのように獲得していったかを解明することによって、プラットフォーム・リーダーシップの内容を明らかにしている。この点も本研究の貢献点として指摘することができるだろう．

しかしながら、もちろん本論文に問題がないわけではない。第１に、本論文の理論的な位置づけは必ずしも明確でない。本論文は、技術規格の標準化競争を駆動していくメカニズムとして、「技術優位」と「ネットワーク外部性」、「特定企業による戦略的リーダーシップ」の３つの理論を併置して、戦略的リーダーシップの影響力の大きさを説明するというスタンスをとってはいるものの、これらの理論は必ずしも並列的な関係になく、理論的なインプリケーションを引き出そうとするときに若干の混乱が見られる。

第２に、USB対IEEE1394という一つの事例に集中し、その中でも日本国内のPCとHDDとのインターフェースを深堀して調査するという方法を採用したために、ややローカルな市場に議論が限定されてしまい，デジュール規格とデファクト規格とのグローバルな競争という興味深い側面がポテンシャルのままとどまっており，十分に引き出せていないきらいがある。

第３に、事例記述は詳細であるが、本論文が持つ理論的なインプリケーションについてはもう少し深掘りできた可能性がある。本論文の分析結果は、先行研究が概念的に提示してきた枠組みの意義や理解を事例分析によって深めるという意味では貢献が明確ではあるものの、その反面、そこでの成果にもとづいて概念や理論な枠組みを拡張ないし精緻化する方向での貢献は相対的に小さいものにとどまっている。

以上のような課題を残しているものの、本論文の貢献はこれらを十分に補うものである。よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第５条第１項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。